## よみがえる！中井の郷土資料 その14
# 火鉢や行火に見る昔のくらし

旧郷土資料館に収蔵されていた火鉢（ひばち）や行火（あんか）、櫓行火（やぐらあんか）は、電気やガスが普及する前の暮らしを知ることができる暖房用具です。

火鉢

行火

櫓行火

火鉢は灰の中で炭を燃やし、その熱で部屋を暖める道具で、かつては多くの家庭で使われていました。また、行火は持ち運んで使う火という意味からその名が付いたとされる暖房具で、炭火を入れて布団の中や足元を暖めるために用いられました。さらに、櫓行火は行火の上にやぐら状の枠を設けることで、布団が直接熱源に触れないよう工夫されたものです。

現在ではスイッチ一つで暖房が使えるのが当たり前になりましたが、昔の人々は炭火を利用しながら、さまざまな工夫によって寒さをしのいでいました。火鉢や行火は、そうした暮らしの様子や先人の知恵を今に伝える身近な民具の一つです。

中井の小学校でも、社会科で「昔の暮らしや道具について」学ぶ機会があります。火鉢や行火は、現代の暖房器具との違いを考えながら、電気やガスが普及する前の生活や人々の工夫を知るための教材として活用できる資料といえるでしょう。地域に残された民具は、中井町の歴史や生活文化を今に伝える貴重なものです。

文：槻真史
（中井町教育委員会生涯学習参与）

## ちょうちょう発し その35
# 「私の青空」

夕暮れ時、ふと「私の青空」という曲が浮かびます。「狭いながらも楽しい我が家～」と、時折コマーシャルソングに使われます。元は1927年、アメリカで生まれた大衆曲で、日本ではジャズソングという分野で、エノケン、二村定一などに歌い継がれました。原題は「マイ・ブルー・ヘブン」。帰る場所があり、温かい日常があり、そこが、私の天国なんだと、陽気に歌い上げます。この歌の陽気さは国を超え、時代を超えているように思います。

幸せのあり方も、まさにこの曲が醸し出す世界と重なるのではないでしょうか。決して特別な出来事の連続ではなく、誰もが心身ともに健康が守られ、いざという時に助け合うこと。慎ましくも暮らしに事欠かないこと。そうした穏やかで「何気ない日常」が今日も明日も続いていくこと。それこそが、私たちが守り、育んでいくべき、「青空」なんだと感じます。

先ごろ、震生湖の太鼓橋が秦野市によって、車椅子でも渡れる「百年橋」として生まれ変わったばかりですが、中井町には観光がないとよく言われます。その通り、観光地、いわゆる物見遊山の場は形成し切れていません。しかし、観光を「光を観る」と読み下せば、中井には「観光」があふれていると私は思います。

私にとって、この町にあふれる日々の小さな幸せを見つけ、形にする手段が写真です。スマートフォンで目の前の感動を切り取り、Instagramへアップしています。私も少なからずいろいろなところに住んできましたが、この町に移り住んで以来、ここで出会う「何気ない日常」ほど、深く心動かすものはないと実感しています。

よく手入れされた田畑、遠くの富士、飛び立つ白鷺や道ばたの草木。プライバシーの関係でなかなか撮りにくいのですが、皆さまの表情。こうした見慣れた風景を慈しみ、日々新鮮な視点で見つめ直すことを、私は「普段使いの観光」と呼んでいます。

遠くへ出かけずとも、自分の足元にある豊かな自然と人々の絆にじっくり目を向ければ、そこにはいつもかけがえのない風景が広がっています。中井の「普段使い」の暮らしの質は高く、大きな可能性を持っています。それでも飾ることなく、日々の暮らしそのものに愛着を持ち、「普段使い」のきらめきをすくい取って生きていく。

今日もまた、愛すべき町を歩きます。レンズの向こう側には、いつも澄み切った「私たちの青空」が広がっているのです。